

近世来待石製石塔出現の一起源

岡崎 雄二郎
西尾 克己
稲田 信
木下 誠
樋口 英行

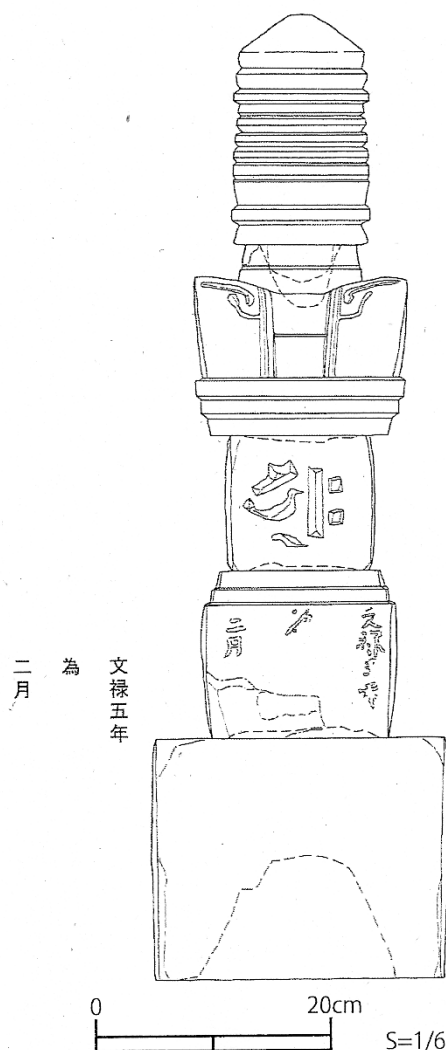
1. はじめに

松江市宍道町^{きまち}来待地区を中心として産出される凝灰質砂岩は、通称「来待石」と呼ばれる。来待石は古墳時代の石棺や石室、古代の寺院などに利用されたことが確認されているが^(註1)、その後の利用は、伝大野次郎左衛門墓五輪塔など来待石製の五輪塔は見られるものの、類例は少なく、系譜を追うには至っていない^(註2)。時代を隔てて岩屋寺（松江市宍道町上来待）に所在する「文禄^(五年か)□□二月」（1596）銘をもつ宝篋印塔^(註3)や「慶長拾貳年三月日」（1604）銘をもつ板碑^(註4)などを最古期に、近世になると来待石の利用は爆発的に広がる。「出雲石」とも称されるように、出雲地方を代表する石材として利用されてきた。

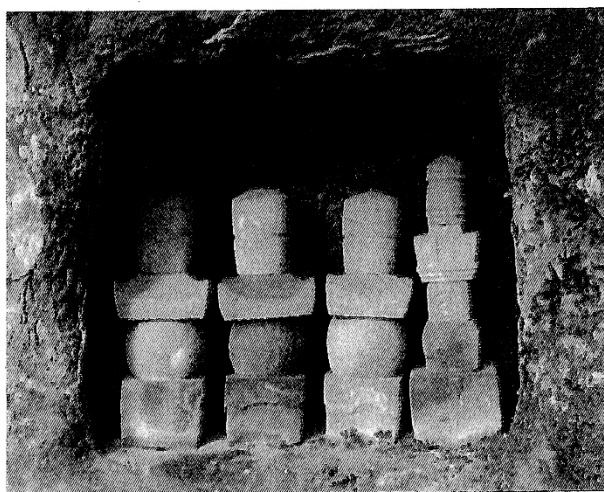
本稿では特徴的な形態をした来待石製石塔の起源について、その出現の契機と歴史的背景を推論し、予察するものである。

2. 特徴的な形態をした来待石製石塔の出現状況

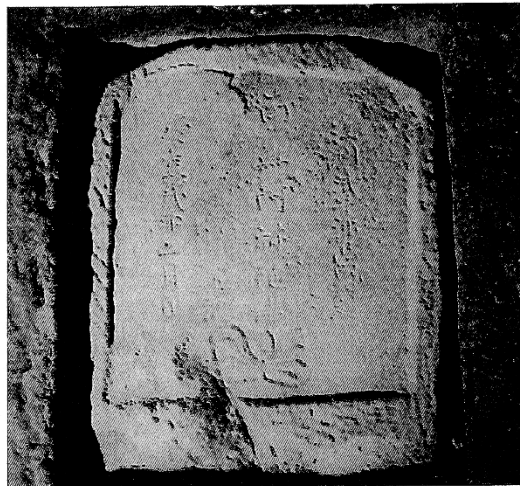
岩屋寺の「文禄^(五年か)□□二月」銘宝篋印塔に見られるように、特徴的な形態をした宝篋印塔は出現当初から独特な形態を備えていた。形態の違いは特に宝篋印塔の笠に見られ、上部段丘の表現、隅飾り内の模様などは日引石製宝篋印塔、白粉石製宝篋印塔には見られない。この特徴に至る石塔の変遷を出雲国内でたどることができない。恐らく、他地域で来待石に類似した石材を利用して石塔製作を続ける過程の中で典型的な宝篋印



第1図 岩屋寺「文禄」記年銘宝篋印塔
（岩屋寺石造物調査団 2008 より一部改変転載）



岩屋寺「文禄」記年銘宝篋印塔
(右端の宝篋印塔)



岩屋寺「慶長拾貳年」記年銘板碑

塔などとは異なる形に形態変化し、その後、石工の移動によって来待石が石塔材として見出されたのではなかろうか。出現当初から独特な形態を備えていたのは、他地域で身に付けた石塔製作技術をもった石工の移動以外に考えにくい。

筆者らはこれまで来待石に関する調査を行う中で、来待石製大型石塔や来待石製石廟に注目し、慶長5年(1600)に出雲国を知行した堀尾氏が一族の墓石塔、供養塔を造立するうえで来待石を利用していることを明らかにし、造立された宝篋印塔は岩屋寺の「文禄^(五年か)□□二月」銘宝篋印塔と系譜を同じくするものと確認してきた^(註5)。

さて、中世後半期において出雲国内では福井県大飯郡高浜町^{ひびき}日引で採石される日引石(安山岩質凝灰岩)製石塔と、松江市宍道町、玉湯町周辺から産出される白粉石^{しろこいし}(石英安山岩質凝灰岩または白色凝灰岩)製石塔、大山の周辺で産出される大山系石材(角閃石安山岩)などが知られている^(註6)。また、伝大野次郎左衛門墓五輪塔など来待石製石塔の例も若干数ある。日引石製石塔には宝篋印塔と五輪塔があり、14世紀後半から15世紀前半にかけて、九州の東シナ海側から鹿児島県坊津、北は日本海沿いの青森県十三湊までの広範囲に運ばれている^(註7)。白粉石製石塔にも五輪塔と宝篋印塔があり、概ね14～15世紀頃におそらく石材産地の松江市宍道町、玉湯町周辺で採石・加工されたであろうと想定できる。白粉石製石塔はどのような技術的系譜をもつ職人集団により製作されたのだろうか、その実態は不明である。

また、鰐淵寺(出雲市)の石造物調査では、16世紀前半段階では来待石・白粉石・日引石・大山系石材など多種類の石材により石塔が構成され、16世紀後半にかけて来待石など1～2種類の石材に収束されている状況が指摘されている^(註8)。このように、出雲国内における16世紀代の墓地では、多様な石材による石塔が造立されていた景観を想定できる。

ここで、来待石製宝篋印塔・五輪塔について見ると、中世後半期段階では伝大野次郎左衛門五輪塔など数例の石塔が散見される状況であり、多様な石材の中での一種類であったが、17世紀を前後する段階で独特な特徴を持つ来待石製の宝篋印塔や五輪塔が突如として多量に製作される状況となる。このことは、日引石製石塔や白粉石製石塔・大山系角閃石安山岩など多種多様な石材で墓地の石塔が構成されていた状況から、近世に入る前後段階には確立した特徴的な形態をした来待石製宝篋印塔や

五輪塔によって墓地の石塔が構成される状況を想定させる。また、こうした来待石製石塔、特に宝篋印塔の確立した特徴については、それ以前の祖型を求める資料がなく、突然として現れた印象を抱かされる。つまり、17世紀前後に多量に製作され始めた来待石製宝篋印塔・五輪塔は、出雲国内に求めることができない特徴的な形態を備えて製作され始めたのである。

3. 堀尾一族に関わる来待石製石塔

来待石製宝篋印塔・五輪塔の制作年代が比定できる資料として堀尾氏に関連した石塔群があげられる。堀尾氏は出雲国を知行して以降、堀尾吉晴、忠氏、忠晴と一族の墓、供養塔には来待石を用いた。出雲国内では堀尾氏の出雲国支配に関わりが深い、広瀬、松江、三刀屋でこれまで確認されており、国外では堀尾氏の菩提所である春光院（京都市）で確認されている。いずれも特徴的な来待石製宝篋印塔・五輪塔で製作されており、来待石製石塔の起源を考察するうえで参考となる。

（1）広瀬（安来市広瀬町）に残る堀尾一族の石塔

広瀬は、尼子氏、吉川氏の居城（富田城）が置かれた場所で、堀尾氏も慶長5年（1600）から松江に移るまで出雲国支配の拠点とした。岩倉寺に堀尾吉晴の墓（五輪塔）、忠光寺跡に忠氏の墓、富田城内に堀尾勘解由の石廟（来待石製大型石廟）である親子観音がある。

①堀尾吉晴五輪塔^{（註9）}

②親子観音^{（註10）}

（2）松江周辺（松江市）に残る堀尾一族の石塔

松江は、堀尾氏が出雲支配の拠点として新たに城と城下町を建設した場所である。堀尾氏の菩提寺である圓成寺（松江市栄町）には、江戸で亡くなった堀尾忠晴の墓（五輪塔）がある。また、松江城の裏鬼門とされる報恩寺（松江市玉湯町）には寺で堀尾忠氏の墓と伝える宝篋印塔、堀尾民部の石廟（来待石製大型石廟）などがある。

①伝堀尾忠氏宝篋印塔^{（註11）}

②堀尾忠晴五輪塔^{（註12）}

③堀尾民部石廟^{（註13）}

（3）三刀屋（雲南市三刀屋町）に残る堀尾一族の石塔

堀尾氏は松江城を本城として富田、三刀屋、赤名、亀嵩に支城を置くが、三刀屋には一族の堀尾掃部、修理を配する。三刀屋城近くに掃部、修理の菩提寺である道安寺が置かれ、現在、道安寺跡には殿様墓と呼ばれる来待石製大型石廟が2基残る。

①殿様墓^{（註14）}

（4）春光院（京都市）に残る堀尾一族の石塔^{（註15）}

春光院は、天正18年(1590)の創建と伝えられる臨済宗妙心寺の塔頭寺院である。堀尾吉晴には、堀尾金助という男子があり、吉晴は息子の菩提を弔うために妙心寺に俊巖院を創建し、この俊巖院が後に改称して春光院となっている。

春光院本堂裏の墓域には、堀尾家の位牌及び堀尾家嫡流の木像を納めた御霊屋と、供養塔或いは墓碑などの石塔群が残されている。この石塔群の中に、来待石製(凝灰質砂岩)の石塔が存在し、堀尾泰晴夫妻石廟(笏谷石製)内宝篋印塔2基を含めた宝篋印塔10基のほか、五輪塔1基、無縫塔1基、舟形石塔1基が確認できる。堀尾泰晴夫妻のものとした石廟内の宝篋印塔1基(正面右)には「天徳寺□□□」「世崇□□□」の文字が刻まれており、泰晴の戒名が「天徳寺殿高菴世崇大居士」であることから、この石廟が堀尾泰晴夫妻のものであると特定できた。他の来待石製石塔については、人物を特定できる銘文等は確認できなかったが、春光院には石塔の被葬者・供養者を記した石塔配置図と墓石表が残されていた。

来待石製石塔の配置は、御霊屋の真裏に堀尾泰晴夫妻石廟があり、正面向かって右側に2基の宝篋印塔(伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔)、左側に大小2基の宝篋印塔(伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔)、伝堀尾忠氏石塔の左通路を挟んで東向きに2基の宝篋印塔(伝奥平家昌夫妻宝篋印塔)が配されている。五輪塔1基(伝野々村河内妻[勝山:堀尾勘解由母]五輪塔)は伝忠氏夫妻宝篋印塔の北に並んだ石塔列の中に、無縫塔1基(伝堀尾忠晴無縫塔)、舟形石塔1基(伝松村監物舟形石塔)は泰晴夫妻石廟のやや離れた右奥に配されている。

「春光院古今院事記」には、石川家(亀山藩主)の命を受けた石川家家臣が出雲より堀尾家の木像とともに「石碑」を移したことが伝えられており、石塔の一部は、堀尾家断絶後に出雲より移送された可能性もある。



春光院(京都)に残る堀尾一族の石塔